

## 第2回文書館振興国際会議に出席して

内田 勝利

第2回文書館振興国際会議が5月18日、西日本会場の京都私学会館で約60人余出席のもとに開催された。ICA事務総長、ケスケメティ博士を迎え、「アーキビストをどう育てるか—世界の潮流—」をテーマに講演された。

講演内容は当日配布された冊子「アーキビスト養成の国際的潮流」のうち、「アーキビストの養成」に掲載されているので、詳細はそれに譲りたい。

端的に言えば、公的機関に就くアーキビストの教育に関する問題について検討された。それも広義のアーキビストということには触れられず、幅広い視野に立

った高度な専門知識をもつアーキビストの養成についてであった。規模の小さい文書館施設においてはやや距離感のある話であったように感じた。

講演後、安藤正人氏(国立史料館)がコメントされ、同時に日本の実情—文書館が少ない、アーキビストが(ほとんど)いないし社会的にも認知されていない—などに触れられた。

博士からは、19世紀にヨーロッパで文書館革命が始まり、それに乗り遅れた国はどこでも同じように文書館は進んでいない、それらの国は文書館がないことに慣れ切っていると指摘され、日本だけでないにしても、耳の痛い話であった。

しかし、日本ではアーキビストの養成について、国立公文書館が講習会を開催したり、学術会議の政府への要望、全史料協周辺の活動などを例にとって、今後進展していくであろうと評価もされた。そして、日本でも国際的な会合を

催し、国外の国際会議に積極的に参加し、いろんな外国の人々と交流して知識や情報を得ることがより専門性を高めることだと進言された。

次に、高野修氏(藤沢市文書館)から、日本に対して、アーキビスト養成についての勧告をICAから出してもらえないか、と要望された。

博士は、ICAは知識を出すことはできても

要望まではと、やや尻込みの発言をされた。高野氏は全史料協が1989年の広島大会で国に要望したがまだ返事がないと発言したが、それに対し、博士は、その要望書を基に国立公文書館に要望してみると約束された。つ



西日本会場(京都市)

け加えて灯台を例に出され、相手方から照らしてもらうものではなく、自ら照らしていくものだとの考え方を示された。

5年前の1986年に大阪で開催された第1回同会議のときもそうであったように、講演の内容を通訳されていたが、翻訳された冊子にはほぼ沿って行われていた。私は国際会議というものに出席したのはこの2回だけなので世間知らずと言われるかもしれないが、短時間の会議の場合、やや時間的に無駄な感じもしないではない。

出席者も事前に把握されているので、講演内容の冊子をあらかじめ配布され、頭に入れたうえで別の角度から話していただき、また質疑応答の時間をより多く設けていただければ時間の有効利用につながるのではないかと思う。主催者のご苦勞はよくわかるが、感想の一端を述べさせていただいた。

(尼崎市地域研究史料館)